

一条通紙屋川出土のキリシタン墓碑

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

キリシタン墓碑が出土 ここに紹介する2基のキリシタン墓碑は、1981年に一条通紙屋川のすぐ西側において実施した立会調査で出土したものです。当時は銘文が解読できませんでしたが、1993年になって京都外国語大学の故松田毅一氏ら多くの方々の協力を得て内容が判明しました。最近、高槻市でもキリシタンの墓地が発見されたという報道もあり、改めて京都のキリシタンの状態を知る遺物として紹介します。

墓碑の銘文について 墓碑1は、高さ48.8cm・幅21.7cm・厚さ13.5cm・重さ25kgあります。上端の一部を欠きますが、本体・銘文とも残りはきわめて良好です。石材は、はんれい岩と呼ばれる火成岩の一種で、墓碑の形式は板碑形に属します。頭部は円頭形で、前面には幅2cm程の縁がめぐります。側面と頭部には鑿^{のみ}による成形時の痕跡が明瞭に残り、背面も成形時の凹凸がそのまま残っています。

銘文は、中央上に「二支十字」と呼ばれる特徴的な十字が「IHS」の「H」に接続し、その下「留野上ちん妾満りいな」、向かって右「慶長九年七月廿二日」、左「さん路加^{州?}□満んへれ」と読めます。「IHS」は「Iesus Hominum Salvor」、すなわち人類の救済者



キリシタン墓碑 墓碑1(写真左・分布図の4)と墓碑2(写真右・分布図の5)

イエスのことです。「留野」は名字、「上ちん」は洗礼名ジョーチン(Jochim)、「満りいな」はこの墓碑本人の洗礼名であるマリイナ(Marina)、「さん路加^{州?}□」は聖人ロカウス、「満んへれ」は彼の出生地フランスのモンペリエをさします。「慶長九年七月廿二日」は西暦(グレゴリオ暦)の1604年8月17日にあたり、この日が聖人ロカウスの祝日であるため、その意味が刻まれたのです。

墓碑2は高さ46.3cm・幅20.7cm・厚さ11.5cm・重さ20kgあり、墓碑1よりやや小さめですが、材質・形態・作り方は、墓碑1と同じです。ただ墓碑1と異なる

るのは、底部中央に台部に差し込むための突起があることです。

銘文は、表面の磨滅が著しく、上部がわずかに判読できただけです。中央に「十字」、その下には「IHS」があります。「H」の横線は途中が折れて十字に接続しています。中央下「□麻□」、向かって右「慶長十二年」、左「十二月一日」と刻まれます。「□麻□」ですが、これが洗礼名なのか、「□麻」が名字で下に洗礼名があったのかは判然としません。「慶長十二年十二月一日」は西暦1608年1月18日にあたりますが、この墓碑には祝日を意味する銘文はみられません。

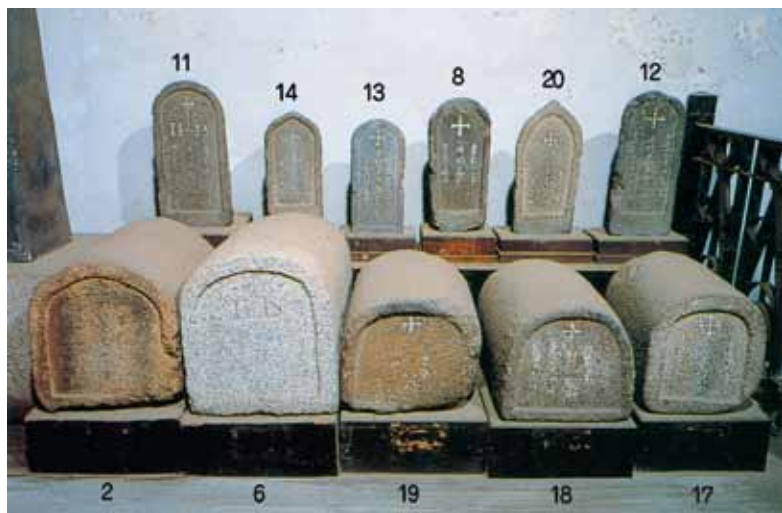
京都のキリシタンと墓碑 キリシタン墓碑はこれまで市内では20基が知られています。その分布をみますと、北野から西ノ京付近と東寺の周辺に多く、今回紹介した2基も前者に含まれることがわかります。ここにキリシタン信者が多数いたことは、当時の公家の日記にも「西京寺」、「北野辺在之寺」と記されていますので、墓碑の出土はこれを反映したものといえそうです。

キリシタン墓碑には必ず年号が刻まれており、それを手がかりにキリシタンの動向をうかがうことができます。年号は慶長7年(1602)から慶長18年(1613)まであり、確認される墓碑はすべてこの間に製作されています。

キリシタン宗門にとって京都は、「ミヤコ」とよばれる布教の中心地でした。最初にキリスト教を伝えたザビエル以来、反対勢力も多くあり困難な活動を強いられましたが、永禄11年(1568)に織田信長が入京すると、キリシタンは庇護され、その結果、一気に布教は拡大しました。しかし、豊臣秀吉の時代になると「伴天連追放令」(1587年)が出され禁制が厳しくなります。キリシタン禁制の方針は関ヶ原の戦(1600年)から大坂冬の陣(1614年)直前までは比較的穏やかに推移するのですが、慶長18年に徳川家康が禁教令を発すると、京都ではその政策を徹底させるため相模城主大久保忠隣ただちかが入京して弾圧が始められ、これを機に京都のキリシタン勢力は壊滅的な打撃を受けまし



キリシタン墓碑の分布図



京都で発見されたキリシタン墓碑 多くは大正年間に発見されている。手前が蒲葺形、奥が板碑形で、番号は上の地図に対応する。京都大学文学部博物館図録一部改編

た。慶長18年以降の墓碑が知られていないのも、この時の弾圧の厳しさを示すとみてよいでしょう。

信者の数少ない遺品であるとともに、近世京都の動向を知る上でも貴重な資料となっています。

このように、キリシタン墓碑は

(丸川 義広)